

自分らしく安心できる「居場所」づくり

みんなが「笑顔」になれる場所を——京都市西京区に拠点をおくNPO法人「コミュニティ・スペース sacula」の代表、木村友香理さんは、子どもや若者、その家族の「居場所づくり」や若者の相談サポートを行っています。社会福祉士の資格を取り、スクールソーシャルワーカーや虐待、貧困・労働などに関する電話相談などその仕事の幅は広い。さまざまな人と出会い、「一緒に考える」ことを大切にしている木村さんに活動内容をお聞きしました。



NPO法人コミュニティ・スペース sacula代表
木村 友香理さん

(聞き手・池田知隆)

ざまなことに「チャレンジできる」「失敗もできる」場所にしています。

——具体的には。

「ひまわり食堂（大人も参加できる子ども食堂）を近くの自治会館で開いています（毎月第1日曜日、11時～14時、18歳以下は無料、大人は300円）。ご飯を食べるだけではなく、ボードゲームなどで遊んだり、おしゃべりをしたり、のんびりしたりと、みんなが好きなことをして過ごしています。安心できる居場所だからこそ、みんながそのままの自分でいられます。夜には「みにひまわり食堂」（毎月第3水曜日、17時～20時）も開いています。

——子どもたちの学習支援もしているのですか。

子どもたちが主体的に学習できる場



▲キャンプを楽しむ

日常生活のモヤモヤにかかりたいと始めました。2016年10月にこの団体を立ち上げ、2021年3月に特定非営利活動法人となりました。

——特に大切にしていることは。

子ども・若者が自分らしく安心した暮らしを過ごすには、「ありのままの自分でいる居場所」と、「自分の声を聴いてくれる、一緒に考え一緒に進んでくれる存在」が必要です。それが私たちの活動の根っこで、相互に繋がっています。

——ご自身はどんな生活を。

システムエンジニアをしている夫と8ヵ月の子どもがいます。子どもは保育園にも通わせていますが、ここでの居場所でいろんな人に会うことも大事だと思っています。

卒業後、生命保険会社の営業職勤務を経て、児童館に勤めながら京都医健専門学校の夜間（1年）コースに通い、社会福祉士を取得しました。

——「居場所」づくりを始めるきっかけは。

児童館に勤務していたとき、子どもたちから「お母さんが20時に帰つてくるまで一人」「土日どこにも行けなくて退屈」という声を聞き、子どもや若者の成長や

所として「学習スペース」（毎週火・木曜日、16時～18時）を開き、スタッフやボランティアと一緒に学習しています。長期休暇の期間には、子どもたちが自由に楽しく過ごせるフリースペースやキャンプなども行なっています。

コロナ禍で特に求められるようになったのが目中の居場所。『おうち時間』が求められる世の中ですが、保護者の就労や家庭環境などの事情から、『おうち以外』でほつとする居場所が必要な子どもが少なくなりません。学校が休校になつていると、フリースペース「クローバー」を開設し、親も子も離れてリラックスできるようになりました。

——親も子も離れてリラックスできるようにしました。

家庭や人間関係などに悩む若い女性のための「ご飯会ミモザ」（毎月1回土曜日）や「お泊り会あさがお」（毎月1回、土・日曜日）を開いています。「女の子の相談を聞いてもらえないか」と関係機関から相談を受けてLINEや電話、対面での相談サポート事業を始め「自立サポートシェアハウス サクラソウ」も開設しました。ここは、家を出たい、一人暮らししたいと悩んでいる人に、入居期間を定めて「一人暮らしの練習をする場です。

行政等の窓口に相談をしても、「もう一度頑張ってみて」とか「家族と話しながらの練習をする場です。

家庭環境に悩みを抱えていて、かつすでに行政等の窓口に相談をして、もう一度頑張ってみて」と言われ、「これ以上何を聞いてもらえないか」と関係機関から相談を受けてLINEや電話、対面での相談サポート事業を始め「自立サポートシェアハウス サクラソウ」も開設しました。ここは、家を出たい、一人暮らししたいと悩んでいる人に、入居期間を定めて「一人暮らしの練習をする場です。



▲子ども食堂の様子

——実際に多彩ですね。そもそもどうして福祉の仕事を選ばれたのですか。

大学生のとき、あることがきっかけで電車に乗れなくなり、次第に大学にも行けなくなりました。「友だちにも心配かけたくないし、このままではダメだ」と様々なところに相談しましたが、「辛かったね」とは言われるものの具体的な解決を一緒に考えてくれる人はおらず、「いないなら私がその存在になりたい」とも考えました。

現状から抜け出すために始めた家庭教師で出会った中学生がめちゃくちやんチャだったんですが、学校での反談を受けています。



▲事務局での活動

場だと実感しています。

——これまで印象に残っているエピソードは。

嘘つき、周囲を困らせることで自分に注意を向けてきました。高校生がいました。4年ほどかわっていくうちに、自分の思いを素直に表現できるようになり、その女性の成長にかかわられて嬉しかったですね。

——コロナ禍での暮らしが長引いていますが。

子どもたちも消毒、マスクをするのは当たり前になり、順応できています。私たちが強制しなくとも、それがスタンダードになり、自立的・自己決定的であります。対応力がついていますよ。

——これまで印象に残っているエピソードは。

4年ほどかわっていくうちに、自分の思いを素直に表現できるようになり、その女性の成長にかかわられて嬉しかったですね。

——どんな人に社会福祉士の仕事をしてほしいと思われますか。

コロナは「人とのつながり」だけではなく「心の余裕」も奪いました。だからこそ、しんどいことからの「気分転換」やいつでもSOSを出せるために「つながり」を絶えさせないことが、居場所にできることだと思っています。

——どんな人に社会福祉士の仕事をしてほしいと思われますか。

社会福祉士の仕事をでは、様々な暮らしの環境に対して相談を受け、アセスメント（見立て）や助言のアプローチをしなくてはなりません。しかし、指導的にならず、その人と伴走しながら一緒に問題解決していくことが求められています。その人が気づいていたかったことに気づき、ステップアップやエンパワーメントにつながっていくとき、すごくやりがいを感じます。そんなことを大切にできる人であつてほしいですね。

——どんな人に社会福祉士の仕事をしてほしいと思われますか。

社会福祉士は、身体上もしくは精神上の障害がある人、または環境上の理由によって日常生活を営むのに支障のある人、困難を感じている人を対象に、福祉に関する相談・国家資格で、学歴や相談援助業務などの経験によってさまざまな資格取得ルートがあります。

——若者の「居場所」は。

『社会福祉士という仕事』
NPO法人コミュニティ・スペース sacula 事務局

〒615-8031

京都市西京区牛ヶ瀬林ノ本町42

メゾン・戸倉205

電話

090-9338-0393

（法人専用携帯）

（協力・滋慶学園グループ）

Eメール sacula.office@gmail.com